

男性（70代）禁煙年齢・70代

「酒でも煙草でも世の中にある物の味くらい知ってから、戦死せにゃ損たい」
セレベス島、ケンダリーにある、第七五三海軍航空隊基地でのこと、灯火管制でまっくらな椰子林の向こうから、

「巡検終わり煙草盆出せ」

と海軍特有の奇妙な号令が、内地に居るときと同じように、聞こえてくる。すると、床板以外殆どアンペラで急造した兵舎に、毛布一枚で寝ていた、下士官はごそごそと起きて外の煙草盆の周りに集まり、各自煙草に火をつけるのである。

この時間は私達新兵にとって、一番楽しみな時間であると同時に、恐怖の時間帯でもあった。それは下士官達のその日の機嫌次第で、例の軍人精神注入棒が、私達二等整備兵の尻に唸り上げる時間帯でもあったからである。

このケンダリーに配属されてから、ビールと煙草が現代で言えば未成年の私達志願兵にも一人前に配給された。それを上官や古兵に献上するのは暗黙の約束で、同年兵の佐藤が何故上官達にまじって、平気で吸っているのか不思議な気がしたが、そのことを深く追求する気はなかった。

「どうね吸ってみんね」

ドラム缶を半分に切った煙草盆を囲んでいる連中の中から抜けて、私の所に来た佐藤は煙草の箱を、私の前に差し出し乍ら、又同じことを云った。

「明日の空襲で、B17かP3にやられるかも知れん、アメリカの煙草は、日本のよりずーと旨かよ」

アメリカの物か、オーストラリアの物かは明確ではなかったが、箱のデザインや色彩は、中味が煙草とは思われない程美しく、日本のバットや光とは比べものにならない位で、吸ってみようか……とつい誘惑に負けそうになる、そんな或る日、丁度七五三空の一式陸攻が12機、魚雷を抱いて暁の出撃をし、護衛の二〇二空の零戦が全機（二十機余り）出撃した後、十時過ぎ頃だったと思う、いきなり敵の空襲を受けた。私の班は朝暗い中から、一式陸攻の出撃準備を終え、後片付けも終わっているときだった。滑走路の端から湧き出たような機影が見えたのと、同時に青白い光が私達の真っすぐそばを通り抜けた。その

光は7、8本で物凄く速くて一瞬何だ……と思ったら真っすぐダダダッという機銃音ヒュッシュューッと空気の切り裂ける音を交えて、双発双胴の機影がキーンと金属音と共に頭上を掠めた。

「P3だ！！全員滑走路を横切って、向こうの草群のところにある防空壕に入れっ！！」

班長が怒鳴った。持っていた整備用具を置いて無我夢中で走った。眼の端に群れているP3とB17の不気味な機影を入れ乍ら……壕内に全員入った所で班長が点呼をとった。一名ずつ氏名を呼んだ。

「紺野昭人」

「居らんのか紺野！！」

二度呼んだが返事が無い。

「誰か紺野と一緒に退避した者は居らんのか！！」

だれも薄暗い壕内に、石像のようになったまま、一言も発しない。

「貴様等、戦友愛は無いのか！！」

紺野とは隣同士の席で、朝食のとき、今夜の銀蠅の打ち合わせをしていた仲だった。

その晩の<煙草盆だせ>の時間に、躊躇無く煙草に火を付けた。私の向かいにいた佐藤がニヤリと笑ったようだ。

終戦を知ったのは、七五三空がボルネオのバンジェルマシン迄撤退して、他の海兵隊に仮入隊している時で、そのまま豪州軍の収容所に入れられ、やっと昭和二十一年六月十七日、復員船で名古屋港に入港したが、上陸は明日と云うことで、そのままもう一泊船内で過ごすこととなった。私にとってはその方が良かった。何故なら明日は私の誕生日で、満二十歳。堂々と煙草を口にしても、誰からも咎められない。そう思うと何だか嬉しくさえあった。平成十一年春、花粉症が変になり、咽喉淋巴節悪性腫瘍、君津中央病院に入院、いわゆる癌である。

それでも未成年時代から始めた悪癖は止められず隠れて吸った。今迄も種な方法で禁煙を試みたが成功しなかった。どうせ俺は駄目だと諦めていたからである。

「米本さん隠れて煙草吸っては駄目ですよ。」

担当看護婦が言った。何か思いつめて、精一杯の勇気を出して言った一言だと、咄嗟に思った。両眼に光るものさえ浮かべているのではないか。このとき

私は深く恥じた。

徐々に量を減らすことを思いつき、家族の協力も得て、見事成功した。あのときのあの看護婦さん、本当に有難う。